

---

**K**

ハム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

K

### 【Nコード】

N6784A

### 【作者名】

ハム

### 【あらすじ】

BUNPOFCHICKENの楽曲、”K”を基にした小説です。

## **1stフレーズ（前書き）**

B U N P   O F   C H I C K E Nのこの曲は、自分の周りには好きな人が多いのです。

未熟な文章力でどこまで書けたか分かりませんが、精一杯書きました。

どうぞ、ご笑読下さい

## 1st フレーズ

週末の裏通り。

人影はまばらで、あちこちに猫の姿がある。  
通りの真ん中を、俺は胸を張って歩く。

鉤尻尾は水平に。

俺の姿を認めた奴らは、こそこそと路地裏へと隠れる。

この街に流れ着いて何年経っただろう。

流れ者の雄猫の俺には名前は無い。それで、不便も無い。  
つるむのは苦手だ。

母猫は、生まれて1カ月の俺たちを置いて消えた。

父猫は、俺以外の兄弟を殺した。

この裏通りなら、俺を脅かす物は無い。

貧弱な他の猫たちも、馬鹿な野良犬連中も。

闇に溶ける様な俺の毛並みを見て、” 悪魔の使者 ” などと呼ぶ、  
処置無しな人間のガキ共も。

だったらお前たちは何なんだ。汚い面で、訳も分からずギャング  
ヤン騒ぎやがって。

何だよ、その手の石は。それで俺を狙っているのかい。

まあ、たまに暇つぶしで遊んでやるには良いが、それ以上の価値

は無い奴らだ。

毎日が無為に過ぎて行く。その事に、何の疑問も無かった。

そいつと初めて出会ったのは、ある夏の日の夕暮れ。夕立の気配の漂う、いつもの裏通りだった。

## **1stフリーズ（後書き）**

本当は短編にする予定だったんですが、上手くまとめられずに長編になりました。

なので、一話一話は短いですが、良ければ、続きもご覧下さい。

## 2ndフリーズ

いつもの様に歩いていると、突然体が宙に浮いた。腹に誰かが触れる、不快感。

着古しのシャツを着た腕が、俺の体を持ち上げていた。

何だコイツは。いつの間に。

ボロボロのシャツが似合う、酷い面をしたソイツは、俺と目が合うと、微笑みながらこう言った。

「今晚は、素敵なおチビさん。僕らは、よく似ていると思わないかい?」

何だそりゃ。ふざけるな。

俺は別に酷い身なりはして無いし、チビでもない。

第一、ベタベタするのは1番性に合わないんだ。

こういう手合いに会うのは、別に初めてじゃあない。

ヘラヘラ笑いながら、近づいてくる人間ってのはかなり多い。対処法は、こうだ。

俺は、全力で不快感の原因、ソイツの腕を引っかいた。案の定、ソイツは「うわっ」とか言って俺を落とした。そのまま路地へと駆け込む。それで、お終い。

の、筈だった。

だけど、ソイツはついてきた。

路地裏を駆け抜けても、塀の上を走っても、茨の植え込みをくぐっても。

ゴミ箱につまづきながら、落ちそうになりながら、擦り傷を作り、葉っぱを体中につけながら。

走っても走っても。何時間でも。

夕立が通り過ぎ、日が完全に暮れた頃、俺は諦めた。  
負けたよ、この変わり者。お前みたいなヤツは初めてだ。

ソイツは俺を、自分のアパートに連れ帰った。

狭く、窓からは、明かりも風もほとんど入ってこない。  
部屋の中は、休日明けの歓楽街みたいに散らかっている。

そこら中にカンバスや絵の具、筆が散らばり、テレピン油の匂いが漂う。

ソイツは、売れない画家だった。

初めは、こんな部屋とつと逃げ出して、裏通りに帰ろうと思った。



だけど、別に帰る必要性が無い事も分かっていた。

ソイツは、事ある毎に俺を気にかけた。

初めて、俺のための餌を買って帰ってきた時は、大きな紙袋を2つも抱えていた。俺はその紙袋に何が入っているのか、最後まで見当もつかなかった。

気まぐれに、1週間ほど部屋を空けた時は、帰ってきた俺を見て、まるで大病の肉親が峠を越えた朝のような顔をした。

俺が部屋に居ると、スケッチブックを持ち出し、姿勢を変える度に俺の姿をスケッチブックに写し取った。

俺は好き勝手にやっていたが、いつの間にかソイツに触られるのは苦にならなくなっていた。

そして、夜。

眠る時に、ベッドに自分以外の温もりがある事の心地よさも知った。

ある日、ソイツは言った。

「素晴らしい夜を僕に与えてくれた、おチビさん。君の名前を決めたよ。君の名は――Holy Night。聖なる夜」

### 3rd フリーズ

俺とソイツが出会ってから、二度目の冬が来た、ある日。  
部屋に帰ってくるなり、俺を抱き上げた。

撫でられ、喉を鳴らす。……俺も丸くなったもんだ。

一息つくど、こんな事を言った。

「参ったよ、ホーリーナイト。絵入り新聞の挿絵の仕事、断られちゃった」

おいおい、それは唯一の収入源だったんじゃないのか？

ソイツの絵はまだまだ画廊に並ぶような代物では無かった。だから、日々の糧は挿絵を描いたり、公園で絵を売って得ていた。定期的な仕事は、新聞の挿絵だけ。その仕事が無くなった。

それから1カ月。仕事は見つからなかった。

絵を売ろうにも、雪の降る公園に散歩に来て、絵を買おうなんていう物好きは居ない。

もともと、仕事以外で描くのはほとんど俺の絵ばかり。

この国では、黒猫は不吉の象徴以外の何者でも無い。そのことが、わをかけて絵を売れなくしているのは、俺にも分かった。

さらに1ヶ月が経って、少ない蓄えは底をついた。

普段から不十分に思えたソイツの食事は、回数も量もさらに減った。

それなのに、俺への餌だけは変わらなかった。

抗議の意味で俺が餌を食わないと、ソイツも食事を取ろうとしないので、仕方無しに餌を食べた。

さらに半月が経って、ソイツはとうとう寝込んだ。

食事も取らず、丸1日寝た後。

のそりと起き上がったソイツは、ほとんどのページが俺の黒い姿で埋め尽くされたスケッチブックの、最後の1ページを破き取る。そして、短い手紙をしたためた。

玄関を出ようとして、つまづき、倒れる。

顔のそばに座る俺を認めると、ソイツは消え入りそうな声で言った。

「ホーリーナイト、お願いがあるんだ。走ってくれないか？」  
走る？ どこへだ？ 俺は小首をかしげる。

「そう。走って、走って、こいつを届けてほしいんだ。夢を見て、故郷を飛び出した僕の、帰りを待っていてくれる恋人へ」

……ああ、分かった。

俺が手紙をくわえるのを認めると、ソイツは目を閉じた。安らかな顔。一緒にベッドに入っていた、あの時と変わらない。

外はどんよりとした冬の曇り空。  
俺は、部屋を出た。

## 4th フリーズ

雪の降り始めた裏通りを、俺は走る。

口には、親友との約束の証。一枚の手紙をくわえて。

久しぶりに俺の姿を認めた野良猫や野良犬が、驚きの目で見送る。子供たちは、相変わらずに石を投げてくる。

驚異の目も、投げつけられる石も気にせず、ただひたすらに走る。

俺は、裏通りを抜け、街を出た。

街道を走る。目的地は、先に見えるあの山の向こう。アイツが話していた、故郷のある場所。

雪の降る山道を、俺は走る。

疲れと寒さで、手足の感覚が鈍る。口にくえわえた物さえ落ちなければ、後は構わない。

「見ろよ!」

「悪魔の使者だ!」

「えいっ!」

「くらえ!」

人間のガキはどこにでもいて、言う事成す事、全部ステレオタイプだ。

「やった！　ざましろ！」

感覚の鈍くなった体に、鈍痛を感じる場所が増える。  
石を俺に当てたガキが快哉を叫ぶ。

その内容も口調も、大差が無い。

俺を追いかけて、同じガキどもが移動してるんじゃないかと疑い  
たくなる。

それでも、走り続けた。

雪の山道に、赤い足跡を残して。

俺の事を名前で呼んだ、ただ一人の親友のために。

「悪魔の使者」

どこからか聞こえる声。石が風を切る音が続く。

俺の名前は”ホーリーナイト”！

お前らなんかに、どうこう出来る俺じゃあ無い！！

心の中で叫び声を上げ、どこまでも走り続ける。

山の頂、道の一番高い場所。

下った先には、周囲を山に囲まれた、小さな街。まるで時の流れ

に置き去りにされた様な、佇まい。

疲れと、流れる血でよく見えないハズの俺の目に、なぜかくつきり  
と見えた。

アイツの故郷。

## Last フリーズ

俺は、アイツの故郷にたどり着いた。

雪に覆われた、小さな街。初めて来たはずなのに、よく知っている街並み。

アイツが「いつか帰りたい」とベッドの中で語った、そのままの風景。

親友の恋人の家はここから数キロ。

再び走り出そうとしたとき、感覚の無くなった足がもつれて転んだ。

「何だ、あれ？」

ここもか。どこからか聞こえる、ガキの声。

「なにになに？」

「何か、怪我してる」

「黒い……猫？」

「黒猫？……悪魔の使者！」

！！

飛び起き、駆け出す。

千切れそうな手足を引きずりながら。

感覚の無くなった体に鞭を打って。

ホーリーナイト。アイツが俺を呼ぶ声がする。



心配するなよ。街では、忌み嫌われた俺だけだ。  
この手紙は必ず届ける。俺が生まれてきたのは、きっと、この日  
のため。

目に飛び込んで来た、聞き覚えのある家。生垣も、屋根の色も、  
窓の位置も、アイツが言っていた通り。

見つけた——見つけた！ この家だ！！

玄関に近づき、扉を引っかこうとする。

しかし、手が上がら無い。

せっかくここまで来たのに。

気がつくと、あれほどしっかりくわえていたはずの手紙も無い。

あわてて周囲に目をやると、隣にアイツが立っている事に気付い  
た。

優しい、けどどこか、悲しそうな顔をして。

何だよ、親友。自分で来られるなら自分で持って来いよ。

苦労したんだぜ、こっちは。

さ、帰ってメシだ。メシ。お前もしっかり食えよ？ あ、それと  
もお前は彼女に挨拶が先か？

アイツは何も言わずに、俺を抱き上げると歩き出した。

俺も、いい加減疲れていたので、甘える事にする。

いつもの様に撫でられて、ごろごろと喉を鳴す。

誰かに呼ばれた様な気がして、恋人は玄関を開けた。  
そして、それに気付く。

スケッチブックの画用紙を使った手紙と、それをくわえ、うずく  
まる、黒い塊。

手紙には、短い謝罪と別れの言葉。  
最後に、ホーリーナイトをよろしく、の文字。

翌朝、恋人の家の庭に、1つの墓標が建つ。

記された言葉は――Holy Knight。 聖なる騎士。

## **Lastフレーズ（後書き）**

稚拙な文をここまで読んで頂いた方、本当にありがとうございます。  
よろしければ、評価、感想の方お願いします。  
忌憚の無い意見をお聞かせ下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6784a/>

---

K

2010年10月8日10時32分発行